2018／夏

和紙だより

季刊　福井県和紙工業協同組合

■目次

越前和紙への提言　柴崎 幸次さん……4
産地今昔　豊田小原和紙工芸……3
取組紹介　五箇歴史研究塾……2
和紙ミニコーナー　情報欄……1

―越前和紙への提言―

■柴崎 幸次（しばざき こうじ）
1964年京都市生まれ。愛知県立芸術大学デザイン専攻卒業。龍谷大学経営学研究科修了。（株）竹中工務店勤務、フリーランスを経て、現在、愛知県立芸術大学デザイン専攻教授。2003年美濃和紙あかりアート展大賞、2006年第46回日本クラフト展・読売新聞社賞等受賞多数。「紙を知り、経験する」を第一目標に、和紙授業を11年間継続。和紙素材の研究展他、和紙産地視察旅行、海外との紙交流、地元小原和紙とのコラボ、など和紙を題材に幅広い活動を地域、学生と共に行っている。

■柴崎幸次さん
（愛知県立芸術大学デザイン専攻教授）
「紙以前から考えるクリエーションを目指して」

●和紙を授業に取り入れる

芸大生の頃、何枚もの紙を張り重ね、中に光が灯ると紙の薄厚で立体的に見える照明器具をデザインし、作品制作やコンペなどに出品していました。十数年後その作品を出してみたら、劣化が激しく、ちょっと触るとモロモロになって壊れた紙がありました。唯一、細かい所にだけ使った、薄美濃だけが全く変化がなく、その時、自分の作品を保証できる期間に考えが及び、紙の性能を知らなくてはいけないと気付いたのです。又、就職してインテリアに関わるようになり、和風のものをデザインする時は、和紙を使いましたが、ある時「和紙って何？」というごく単純な質問に、「日本の伝統紙」くらいにしか答えられず、和紙の中身が全然分かっていなかったと反省させられました。

海外の学生は、自国の素晴らしい事や物を熱く語りますが、日本の学生は、世界無形文化遺産にもなった和紙のことをちゃんと話すことができるのだろうか？将来、学生達が世界に出て行った時、日本の和紙のことをきちんと伝えられるだろうか！紙をきちんと勉強しよう！というのが、和紙を大学の授業で取り入れたひとつの理由でした。

●紙以前からデザイン

紙の授業は、一、二年でデザインの基礎実技、コンピュータ、歴史・文化や理論を勉強した後、三年時の専門課題として選択することができます。視覚伝達、プロダクト、環境、メディアの四つのデザイン領域のうちの、「メディアデザイン領域」の中で五週間かけ、「紙を作る、デザインする、メディアとしての紙」という課題を学びます。

昔から芸術大学では、素材と向き合うことが重要視されてきました。頭だけではなく、素材に触れ、触感や音など、様々なものを含めて手で考え、そこから新しいクリエーションが生まれる。しかし今の学生はパソコンで考えて、制作する機会が多くなり、それぞれいい作品もできるが、自分で考えて、経験して失敗して、そこからひらめくような機会を失っているところがあります。今日、物や情報があふれ、応用や模倣で、ものがデザインされやすい状況にありますが、一からひとつひとつ自分の力でオリジナリティあるものを生み出していく基本的な創造力は、頭でっかちの知識だけでは育むことができないと思うのです。デザインの授業に和紙を取り入れている意味はそこが大きい。紙を買うことから作品作りが始まるのではなく、紙以前からデザインしてみる。紙をきちんと知り、紙を経験していくことが主眼です。学生と一緒に、試行錯誤しながら、必要な漉き舟や馬鍬も職人が使っているものを実測して自分達で作り、和紙漉き工房を設置し、和紙を製作できる環境を整えてきました。学生は、和紙（楮紙）、洋紙（コットンパルプ紙等）の製作、サイジング、ドーサ引き、打紙などの加工法を学んだ後、自らの紙を企画、デザインし、試作を行い、その紙を使って作品を発表します。講師陣には、小原和紙の紙漉き職人はじめ、歴史的な紙や世界の紙、エコな紙に詳しい方々が来て下さっています。

学内の紙漉き工房

●活動から拡がる連携

二〇〇七年から、毎年和紙に関連する技術や地域を視察する「和紙旅行」を行っています。全国の和紙工房、研究施設、展覧会など、十一年間で六十ヶ所くらい訪問し、「和紙旅行ノート」として記録に残しています。日本の紙は非常に多様で、地域の歴史と結びつきながら現代に継承されています。その中で現在どんな紙が作られているのかを見極め、性能、技法、用途を知る貴重な機会です。歴史に残る古い紙や背景を知る勉強も欠かせません。昨年の正倉院展には、正倉院文書を楽しく読み解く丸山裕美子先生に同行していただきました。

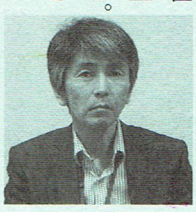
2007年から行っている「和紙旅行」では、これまでに60ヶ所視察。左は奈良の和紙旅行。

二〇二年から、私の研究室と小原の「豊田市和紙のふるさと」のコラボによる豊田美術館での「和紙素材の研究展」や「三河森下紙」の復元と活用のプロジェクトが始まっています。厚手で丈夫な森下紙は番傘、障子用紙として生産されましたが、需要がなくなり一度は途絶えたものです。昭和初期、工芸家・藤井達吉の指導で「小原美術工芸紙」として知られるようになりましたが、現在、土、米粉、消炭入り森下紙の復活や商品開発を試みています。

「和紙素材の研究展」は昨年九月ニューヨークのブルックリンでも開催し、同月ドイツ・ミュンヘンの国際工芸品フェアで"Japanese Washi Art & Design"のブースを主催しました。又、昨年から三年間の予定で、愛知県芸大とウズベキスタン、韓国、中国の四つの芸術大学と「手漉き紙文化と芸術表現」をテーマに調査・復興・再生共同研究が始まりました。東洋と西洋の紙の交叉地点、サマルカンド紙の復興・素材・技法調査と現地の細密画の復元模写、博物館所蔵品に詳細な紙情報を加え、データベース化するなどの課題があがっています。

■「豊田市和紙のふるさと」豊田小原和紙工芸 ―一人の工芸家との交流が育んだ和紙工芸のまち

「豊田市和紙のふるさと」は、愛知県豊田市小原地区(旧小原村)で生まれた「豊田小原和紙工芸」の普及発展を目的に設置された施設である。一九七九年、愛知県の紙漉き体験施設として全国に先駆けて開設。二〇〇九年、運営は豊田市に移り、現在全施設を合わせて、約十五人のスタッフが働いている。展示館で館長の冨樫朗さんにお話を伺う。



展示館館長冨樫朗さん

●三河森下紙

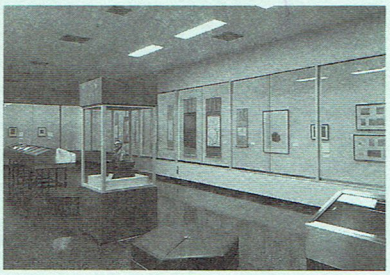
小原村史によれば、この地に和紙作りが始まったのは室町時代、明応五年(一四九六年)、隣村の現豊田市東萩平町にある三玄寺を開いた柏庭という僧侶が、貧しい村の冬仕事に紙漉きを教えたとある。明治期には、美濃の武儀(むぎ)という地域で作られた厚手の強靭な「森下紙」が小原に広まり、「三河森下紙」と呼ばれた。地元の楮を使用し、主に番傘用紙を中心に、障子紙等を生産して岐阜や足助の紙問屋に卸した。明治期には三十数軒あったとされる紙漉き農家は、昭和初期には衰退し、現在、伝統の三河森下紙を漉く家は残っていない。

●藤井達吉が導いた工芸和紙

昭和に入り、生き残りをかけ結成された「小原製紙副業組合」に、昭和七年夏、愛知県碧南市出身の工芸家・藤井達吉から、厚物の三河森下紙の注文が入る。彼は、自身の「創作染織図案集」(文雅堂、昭和八年刊)に使う昔ながらのいい和紙を探していたのだった。これを機に藤井と小原の人々との深い交流が始まる。

大正から昭和にかけ、藤井は、高村光太郎、岸田劉生が参加するフュウザン会はじめ、前衛的なグループに参加し、農民美術運動の山本鼎や、草木染めの命名者・染織家の山崎斌(あきら)など当時気鋭の画家・彫刻家・工芸家と親交があった。又、白木屋百貨店(現在の東急百貨店)の図案部顧問に籍を置きながら、主婦の友社で家庭婦人向けの手芸手引書を執筆。縫い物、刺繍、染色、ホームスパン織物、七宝焼きなど様々な手工芸にも詳しかった。藤井の活動は生活者自身が日常生活を豊かにするための「自らが作る工芸」という視点が強かった。

藤井達吉氏



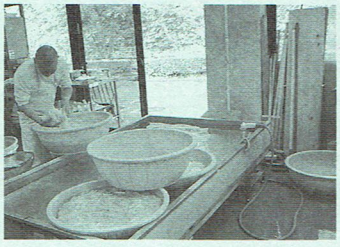
小原の村人は夏場の注文にも拘わらず、皆で分担し、一ヶ月かけて二万二五〇〇枚の紙を納めた。昭和七年暮れ、お礼のため初めて小原を訪れた藤井は、小原の人達に細々と紙を売るのではなく、紙に付加価値を付け、身の回りにあるものを活かして、ここでしかできない工芸品を作ることの重要性を蕩々と説いた。小原地域は生漆が取れる地域で、北陸の漆かき職人がやってきては樹液を採取していく。藤井は、「せっかくそんな宝がありながら、他所に持って行かれ他所の宝になるのではなく、漆を使って地域独自の産業を興すこともできる」と話し、それが小原の紙・漆の工芸が生まれるきっかけともなった。彼は又、白木屋百貨店のお中元、お歳暮商品に小原で団扇、一閑張の銘々皿などの紙工芸品を作らせ、作品はデザイン的にも優れていたため、評判が良かったという。

●和紙工芸家で成り立つ特異な産地

終戦間近の昭和二〇年、藤井は小原に疎開し、北大野町の鳥屋平(とやがひら)に、紙漉き共働工房、陶芸窯、画室、客室など数軒のアトリエ小屋を建設。そこで知人の工芸家を招き様々な工芸を教えた。戦後、紙漉き農家の職人達は、戦地や都会から郷里に戻ってきた若者に紙漉きを教え、藤井の元に通った若者は工芸を加味していき、小原の和紙工芸が本格的に始まった。藤井が碧南市へ移った後も交流は続き、高度成長時代には全国でも珍しい和紙工芸家のいる特異

和紙絵ワークショップの様子

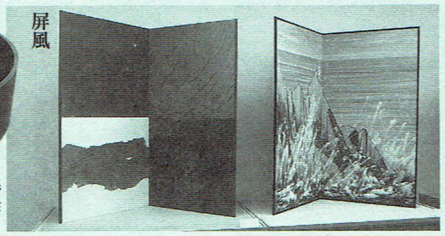
工芸館内の紙漉き工房

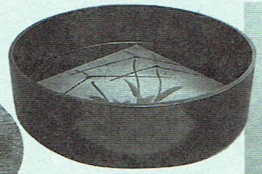


な産地として知られるようになった。藤井に直接師事した安藤繁和、小川喜数、春日井正義、加納俊治、山内一生などはいずれも日展、伝統工芸展などで活躍し、豊田小原和紙工芸の基礎を築いた。技法は、和紙漉き込み画、和紙と漆、漆画、乾漆、一閑張など多岐に渡り、作風も具象から抽象まで幅が広い。近隣には現在二〇人ほどの作家が工房を構え、いずれもギャラリーや画廊、口コミからの直接注文で屏風、タピストリー、和紙絵画、照明器具などの作品を収める他、教室を運営している所もある。工房を巡るツアーも年二回行われている。

「作家の方達は、紙を作る所からデザイン、加工、仕立てまで全てできるので、他の産地のように外部デザイナーを入れて、商品開発をするということがないのも珍しいかもしれません」と冨樫さんは言う。

愛知県大とのコラボは、「和紙素材の研究展」支援、藤井が指導した土や植物で染色した三河森下紙の復元、実用和紙の商品開発を課題にしている。二〇二〇年には、「国際紙フォーラム」(IAPMAイアプマ：The International Association of hand Papermakers and Paper Artist 大会を含む)が当地で開催予定だ。


屏風


小原和紙工芸
一閑張塗草文菓子器
安藤則義作

鮮(部分)二村純生作

取組紹介

■「五箇歴史研究塾」-紙の里に残る貴重な史料を読み解く市民の会

越前和紙の産地に残る貴重な古文書、絵地図などの史料を読み解き、勉強し合う市民有志の会「五箇歴史研究塾」が発足したのは、平成二五年五月。メンバー二〇名は、殆どが仕事を退職したリタイア組。月一回一時間、古文書解読の勉強会を開催する他、年一回実際に歴史の舞台となった地を巡る史跡探訪、史料のある博物館・資料館・図書館等を訪れ、専門家に話を聞く訪問調査や講演会等を行っている。代表の八十島幸雄さんと会員の吉田勝雄さんにお話を伺う。

八十島幸雄さん

吉田勝雄さん

●講の記録から

当塾は、江戸期に紙の仲買商人の家であった吉崎宇右衛門氏、故津田育宏氏の提唱により立ち上げられた。和紙の神を敬いながら、今一度、和紙に関わりのある五箇地区の郷土・歴史を振り返り、次世代へ繋げようというのが狙いだ。

「活動の手始めは、この五箇地区に多く残る神社の歴史を調べました。ひとつひとつのお宮さんがいつ頃、どのようにしてできたのか、神社関係者や近隣住民に史料を集めてもらい発表していただきました。」と八十島さん。

この地域は、昔から氏子を中心とする「講」というコミュニティ組織が様々な役割を担ってきており、今でもそれは続いている。神社の管理も含めて、祭り・式典の実行、日常の草取りや掃除にいたるまで、講が取り仕切り、様々な事が記録され、神社に保存されてきた。地区により岩本は「薬師講」、不老は「堂の講」、新在家は「神明講」等の名前が付けられ、構成員は古株から順に、一老、二老、三老、四老、堂番、六老等の呼び名で、様々な事が引き継がれていく。塾の調査によると、講の運営方法は、少しずつ地区によって違い、半年単位で新人一人が入ってくる所もあれば、一年単位で二人入ってくる所もある。いずれにせよ講単位の記録が貴重な史料となり、歴史へのアクセスを可能にしている。

かつて、大滝神社の一の鳥居があった場所が現存する

●地道な解読作業

古文書は多く残るが、昔の字だから読めない。それでは古文書を勉強しようとなった。最初は権威ある先生に指導をお願いしたが、その方はいわゆる武士が書いた藩の記録などは簡単に読めるが、地元の商人や奉公人の字は正確なくずし字になっていないので、読みづらいと辞退された。現在は独学ながら、庶民の書く文字も多く読んでいる池田正男氏に指南をお願いしている。皆で古文書のコピーを見ながら、くずし字を現在の字に置き換える「翻刻」を行い、先生に解読していただき、現代語テキストに置き換え、意味することを一緒に解読していく。

「先生は古文書を読めるが、和紙のことはご存じないから、意味が分からない。我々はその反対なので、史料を一緒に読み進めながら付け合わせると、少しずつ内容が分かってきます。」

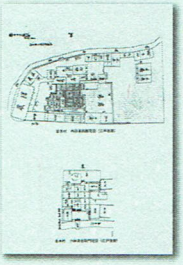
公民館で古文書を読む塾の皆さん

●成果

研究塾は、昨年「福井県まごころ基金」の助成を受け、「お札のふる里…越前和紙とのかかわり」をまとめた。時代時代でお札と五箇との関係は所々に散見されるが、藩札、太政官札、紙幣まで、全体的な繋がりを見渡せる史料がなかったため、あちこちで調べた七十頁の労作だ。幕末から明治にかけての、日本の紙幣用紙の歴史が、五箇の紙仲買人の生々しい駆け引き、価格や取引記録、写真資料などと共に辿られている。

又、越前和紙を愛する会発行の「和紙の里」三八号(二〇一七年)には、幕末の紙仲買人・小林家から寄贈された「小林家文書」に残る、文政八年の福井藩主五箇地区訪問記録の様子を読み解き掲載した。幕末、福井藩同様、全国の藩が財政危機に苦しむ中、福井藩主は幕末から明治にかけての五十年間に、都合七回も五箇地区を訪れている。この時期全国でも稀なことに、福井藩は財政改革

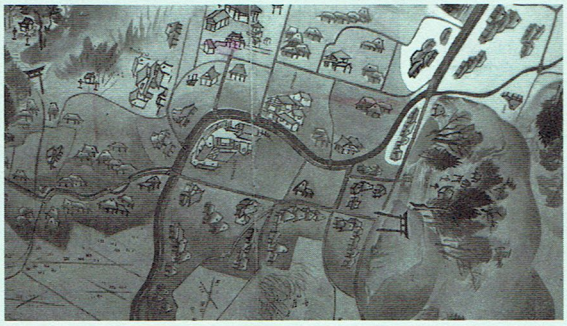
会でまとめた冊子「お札のふる里」


福井藩主訪問の際には休憩する家の図面も提出させた

に成功したが、その一因は大衆化した紙とその消費を支えた五箇の紙生産と商いにもある。文書には福井藩の財政改革に寄与した紙産地のもてなしの様子がイキイキと描き出されている。

又、本年五月の岡太神社・大瀧神社一三〇〇年祭の折には、先の小林家が作らせ献上した大きな絵図「五箇村粟田部村絵図」(弘化二年制作)が一七三年ぶりに里帰りしたのを機に、原寸レプリカを古民家に展示し、訪れた人に絵解き解説を行った。最上級の鳥の子紙を用い、京都の絵師が一年余りかけ、春・秋の五箇の町並みを子細に描いたもので、大瀧神社始め、主だった紙商人の屋敷や裏の道まで正確に描かれた美しい絵図である。吉田さんは「何回この絵図を見ても見飽きることがありません。史料に向き合い、ジグソーパズルのように一つずつピースを集めていくと、初めて史実の全体像がおぼろげながら見えてきます」と語る。

現在は、大瀧神社文書の中のひとつ、岩本村川崎家から寄贈された「川崎文書」に挑戦している。紙の統制権を強化しようとする福井藩の原料調達規則や技術流出を防ぐ婚姻関係の縛り等が垣間見えるという。



展示した原寸レプリカ「五箇村粟田部村絵図」(1845)の一部

■紙漉き職人のワーキングウェア完成

越前市(株)長田製紙所は、「仕事中にテンションの上がる服が欲しい」と、紙漉きに特化した「職人服」を開発した。

今年二月、地方創生ビジネスプランコンテストに応募した企画で、惜しくも受賞は逃したが、とにかく形にしてみたいと長田千葉さん、泉さん親子が中心になって推進。地元福井のテキスタイルデザイナー辻麻美さんと、兵庫県在住のパタンナー内野玲子さんの協力で、四月末完成した。

割烹着タイプとエプロンタイプの二種類があり、実用的でかわいい職人服に仕上がった。薄手の割烹着タイプは、首回りが作務衣風になっており、下に沢山重ね着できる。前にスマホポケット、背中にはカイロポケット付き、肘までまくることのできるゴム入り袖口は水仕事の際、下がってこず、きちんと止まり、痛くない。厚手のエプロンタイプにも同じく裾にはスリットが入り動きやすい。双方ともフリーサイズ。

生地は耳付き天然紙をイメージした手紬手織りのインド綿、伝統的なブロックプリントで染色された格子模様。この職人服は千三百年祭期間中の掘り出し市でお披露目、販売された。

情報欄

●イベント情報

■第10回越前和紙七夕吹き流しコンテスト作品展
時:7月7日(土)～7月22日(日)
場所:越前市いまだて芸術館

■増浦行仁写真展
時:7月21日～9月2日
場所:うだつの工芸館

■越前市小学校卒業証書漉き
時:7月19日(木)～8月30日(木)
場所:パピルス館(協力:越前和紙伝統工芸士会・越前和紙を愛する会)

■おもしろフェスタ2018
時:7月28日(土)～29日(日)
場所:サンドーム福井(越前市)体験

■越前市クラフトフェス
時:8月25日(土)～26日(日)
場所:越前市AWIアリーナ　即売

■山口マオ原画展
時:9月5日～10月8日
場所:紙の文化博物館

■越前モノづくりフェスタ2017
時:9月15日(土)～17日(月・祝)
場所:サンドーム福井　展示・体験

■全国手すき和紙連合会福井大会(シンポジウム・大会)
時:10月28日(日)～29日(月)
場所:越前市:あいパーク今立

■RENEW
時:10月19日(金)～21日(日)
場所:河和田地区・越前市内(展示・即売)

●全国手すき和紙連合会福井大会＋越前装飾料紙シンポジウム(予告)
10月28日(日)・29日(月)
昨年「越前鳥の子紙」が国の重要無形文化財に指定され、当地の「紙の文化博物館」もリニューアル、今年5月には、紙祖神神社・大瀧神社の1300年大祭・御神忌が行われました。越前ではこの機を捉え、「全国手すき和紙連合会」の全国研修会および「越前装飾料紙シンポジウム」を開催し、日本の和紙の魅力を世界に発信したいと考えています。シンポジウムの他にも、産地見学会、特別展覧会などが開催されます。どうぞ、ご参加下さい。

■越前装飾料紙シンポジウム
平成30年10月28日(日)　於 あいパーク今立ホール
講演「かな書道と平安の装飾料紙」名児耶明氏
「現代に甦る四種の料紙とかな表現」高木厚人氏
「平安装飾料紙と色の世界」吉岡幸雄氏　他
主催:越前装飾料紙シンポジウム実行委員会
共催:文化庁、越前市、福井県和紙工業協同組合、和紙文化研究会
後援:全国手すき和紙連合会

編集後記
秋田県湯沢の古い庄屋の友人宅を訪れた。兄が幼い頃、近所のおじさんに習っていた湯沢凧の絵が土蔵から出てきたと見せてくれた。何でも江戸時代元禄年間からの歴史があり、竹組に和紙を貼った凧には豪壮な武者絵や歌舞伎絵が描いてあった。この様な文化があったのだと感じ入った。(よ)

季刊・和紙だより 第59号(2018年夏号)　発行日:2018年7月20日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA　〒520-0025　滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209　Tel/Fax: 077-523-4172　E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所:有限会社新進堂印刷所(京都府宇治市)　用紙:機械漉き大礼紙(石川製紙株式会社製)
※無断での転写・転載はお断りします。